
弱者は努力する。

素浪人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱者は努力する。

【Nコード】

N3862Z

【作者名】

素浪人

【あらすじ】

織斑一夏が世界初のISを動かした男として注目を受ける中、日本はもしかしたらまだ居るかもしれないという期待を込めて男性に対してIS適正を調べる検査を行った。そして浮上するさらに二人の男性。

一人は才能の塊。

もう一人は……。

プロローグ

神様のミスにより転生。

二次創作の話では良くある話だ。

何故なら簡単に物語の世界にイレギュラーを入れられるからだ。

しかし、この理由はありえるのだろうか？

神様がミスを犯す。普通なら考えられない理由だ。

だが、所詮は創作話の話だ。それくらい許されてもいいだろう。

話を今に戻そう。

俺は今、真っ暗な空間にいる。

伸ばす手の先も見えないほどの黒・黒・黒。

ここまで来ると闇という言葉がぴったりだろう。

その世界にぼんやりと眼鏡を掛けた中学生っぽい女の子が現れた。

「ご、ごめんなさい。か、神様ッたら間違えてあなたを殺してしま
ったみたいで」

人を間違えて、ね。ほんとかな？ わざとじゃないの？

「う、そそ、そんな事無いですよ。ほんと神様ッたらうっかりやさ
んで……」

……もうその話はいいや。

それで？

用件はなんだ？

「え？ は、はい。そのですね。申し訳ないんですが、あなたにはお詫びとして物語の世界に転生してもらおうかなと思ってまして」

……………そうか。

「……………そうですね。転生していただくのは『IS インフィニット・ストラトス』の世界となります

あなたは主人公と同年代で、まったく関係の無い所に住む事にはなりません。物語が始まった途端に主人公たちに召集を受ける事になってますのでご了承下さい」

分かった。

「あ、特典の方ですが、要望は聞きますよ？ 何がよろしいですか？」

……………それよりも一つ、聞きたい事があるんだけど。

「あ、はい。なんででしょうか？」

……………これから俺が行くその世界って、他の転生者は居るのか？

「えーっと……………、はい。いますね。一人同じ理由でなくなった方がいらつしやったので、既に転生済みです。ちなみにもう転生させる予定は無いので、実質この世界のイレギュラーはあなたたち二人だけです」

……………分かった。

「それで、特典はどうしますか？ 内容によっては2、3聞きますよ?。」

転生者の能力を破壊する力が欲しい。

それと良かったら強力な催眠術を教えてください。

「催眠術のほうは軽いのですが、転生者の能力を破壊する力ですか？ これは結構容量食ってしまいますねこのままだとこれは渡せないかもしれません」

だったら、既存の力を削ってくれ。

……… そうだな。IS適正を削ってくれ。それとそれ以外の身体能力とか、どうせ過剰に供給してるだろうから普通レベルまで落としてくれ。

「なるほど、それなら大丈夫です。転生者の能力を破壊する力ですが、完全にオリジナルなので新たに創造しないといけないんですが、どういった風に使いますか?」

……… フィールドタイプで行く。

自分自身を常にそのフィールドで包んでいて、触れるだけで転生者の能力が破壊されるような物だ。

「なるほど、了解です。相手はたった一人ですが用心深いのですね」

……… まあ……… な。

「はい、では頑張ってきてください」

女の子の姿が闇の中に消え、そして意識を失った。

俺が貰った能力は転生者の能力破壊。

これはフィールドタイプで完全オート。知らずに転生者と接触でもしたら相手の能力は今生では使えなくなるだろう。これで身を守れる。この力はこれからの『俺』のための大事な力だ。

『俺』はきつと様々な困難に巻き込まれるだろう。その最たるものがもう一人の転生者だということは簡単に予想が付いた。だからこそ自分の力を削ぎ落としてまで手に入れた能力だ。これならきつと身を守れるだろう。

もう一つ。これは催眠術の知識。

能力としなかったのは、これ以上余計な力はいらなかったからだ。

正直に言おう。俺は転生を望んでいない。

俺の今生はいわば玩具だ。

神だとかそんなような生き物？の操り人形としての生で、幾ら意識しないようにしてもその知識がある限り俺は奴らに縛られ続けるだろう、おれはそんな人生望んでいない。俺としての人生は前の世界での生活だけだったんだ。こんな誰かの操り人形になるくらいなら。

こんな人生はいらない。

俺は今、赤ちゃんになっている。

母親らしき女性がこちらに向かって涙を流しながら喜んでいる姿を見て。俺はこう思う。

「今、あなたに素敵なプレゼントを贈ります」

俺は催眠術の知識にある自己暗示を行うため、自らの視界に自分の握りこぶしを入れる。

それではさようなら。

そして俺は自らの記憶を全て消した。

プロローグ（後書き）

能力つてのは物にもよるけど強力なものは本当に協力だからね。だからどんな能力ではとりあえず破壊しとくといい。転生者殺しの力となっています。

1 現在まで（前書き）

一気に話を進めます。

1 現在まで

こんにちわ。僕、一宮羽いちみやねと申します。

突然ですが、今僕、なんとあのIS学園に通っています。

どうしてこんな事になってしまったのか。簡単にはご説明しますが、ご説明します。

高校受験を控えたとある一般学生だった僕はある日、何気なく新聞を見るとすごい事が書いてありました。

「世界初、男性『IS』操縦者誕生！」

そう、あの『IS』に乗れる男性が現れたのです。

ああ、ちなみに『IS』っていうのは、とある天才が開発したパワードスーツの事です。

省略せずに言うと、『インフィニット・ストラトス』と言う名前です。本来は宇宙に進出するための物だったらしいのですが、なんだか戦えてしまったので、今では核兵器よりすごい武器になっちゃってます。

これのお陰で世の中は男尊女卑から女尊男卑の世界になっちゃいました。

そんなすごい『IS』に乗れる男性である織斑一夏くんが存在で、日本は「もしかしたら、他にもいるかも！」と思ったようで、全国で一斉にIS適正検査が行われました。

そしてそして、何故か何故か僕にIS適正があることが判明しました。自分のことながらびっくりです。

そういうわけで、僕は世界で三人目の『IS』操縦者となりました。何がなんやら分からないうちに、政府の偉い人たちが来たり、ISを実際に触ってみたり色々していると、いつの間にかIS学園にいました。

いつの間にかと言うのは語弊がありましたね。政府の偉い人に今日からここに行きなさいとIS学園に連れてこられて入学手続きをした後、三日ほど、近くのホテルで必死に教本を読んで過ごしました。

IS学園に入学。そして初授業。クラスは1年1組でした、

クラスには他の男性IS操縦者がいます。全員このクラスにまとめられたんですね。

そして

「はじめまして、一宮羽と申します。世界で三人目の『IS』を用できる男という事でこの学園に呼ばれました。ISの適正は低かったです。精一杯頑張っていると思います。よろしくお願ひします」

といった感じの挨拶をしました。

クラスメイトからはたくさん拍手をいただきました。

そして最初の休み時間。

何故か二人目の男である新島要さんにいしまかなめに屋上に呼び出されました。

はて？ 何の用でしょうか？

疑問に思っていると、要さんがいらだったように話し掛けてきました。

「なあお前、転生者だろ」

「え？ 転生者………？」

「とぼけんなよ！」

突然僕のほうに迫り、胸倉を掴んできました。

すると、「パリッ！」と割れるような音がしたと思うと、要さんが

身に付けていたペンダントを見て呆然としていました。

「どうしたんですか？」

「……………」

返事がありません。

良く分からないので首を傾げていると、いつの間にかもう次の授業の時間が迫っていたみたいです。

「もうすぐ次の授業が始まるから急いだ方がいいよ」

呆然としている要さんに一言告げ、僕は教室へと急ぎました。

授業中、途中から教室に入ってきた要さんは織斑先生の出席簿アタックの出迎えを受けてました。

さらに次の休み時間。

突然イギリスの代表候補生だというセシリア・オルコットさんに絡まれました。

そしてその後の授業で、男性操縦者＋セシリアさんの計4人でクラス代表の資格を賭けて戦う事になりました。

僕は入学早々のバトルと言う展開に驚きながらも、だが無様な戦いは出来ないという猶予の一週間で出来る限りの事はしたつもりでした。

僕が使ったのはフランスはデュノア社のラファール・リヴァイヴというISです。なかなか万能なISらしいです。

他の方のISですが、全員専用機を持っていたはずですが、何故か要さんの専用機が壊れてしまったようで、代替として打鉄という国産ISを使っていました。

それで戦いですが、総当り戦で結果、僕は要さん以外の全員に負け、1勝2敗という成績でした。

要さんとは初戦同士だったんですが、何故か棒立ちだったので手に持った銃を乱射していたら勝ってました。

セシリアさんとの戦いですが、彼女はブルーティアーズというカッコいい名前のビット兵器を駆使して攻撃してきました。これらのビット兵器4つがそれぞれバラバラな動きをして攻撃してきました。こういうのってきつと自分の意思で動かしているはずだから、彼女は4つのビットを自分の意思でばらばらに動かしていると言ふ事に気付いてすごく驚きました。セシリアさんはすごいですがその分、彼女本体は棒立ちだったので銃で撃つてダメージを与えられました。危うく完全試合になる所だった。

一夏くんとの戦いは勝負になりませんでした。幾ら銃を撃つても当たらないんです。ひゅんひゅん躲していつて、いつの間にか懐に入られて切られてお終いでした。一夏くん強いです。

結果としてクラスの代表は一夏くんに決まりました。僕も応援しています頑張ってください。

とまあ、ここまでが僕に起こった出来事でした。すごい人たちばかりで感心するやらびっくりするやらです。

でも僕はこの戦いを超えて思ったことがあります。それは『くやしい』という思い。

同世代の一夏くんに簡単に負けてしまいました。男の子としてこれはとてもくやしい！
と言っわけでいつかりベンジできるように必死に練習する事にしました。

今も部屋で気合を入れています。

「おー、今日も頑張ってるね。羽ちゃん」

同室の本音ちゃんも応援してくれています。

「うん。一夏くんやセシリアさんに負けないくらい強くなるよ僕は」

「がんばれー羽ちゃん」

うん。頑張る！

2 それから、強力な味方と（前書き）

ご指摘があった点を多少修正してみました。

校庭の周回の部分はちょっと待っててください。
こっちでも確認します。

2 それから、強力な味方と

目覚ましが鳴り飛び起きる。さつと目覚ましの音を止めて伸びをする。

カーテンの脇から外を見る。今日も快晴であった。

ベットから降りてふと同室の子を見ると今の音では目覚めなかったようだ。

ささつと着替えて日課のランニングの準備を始めた。

「今日も一日頑張ろう」

総当り戦のクラス代表決定戦の翌日、SHRの時間に山田先生からクラスの代表は一夏くんに決まったと報告されました。

本来は勝率の一番高かった（なんと全勝）セシリアさんが代表になるのですが、どうやらそのセシリアさんが辞退したようで結果次に勝率の高かった一夏くんとなった次第です。

一夏くんは抗議しましたがもちろん却下。本人の意思は残念ながら反映されず、クラス代表になったのでした。

（ならセシリアさんの辞退は何で受け入れられたんだろう）

多少疑問は残りましたがそれはそれです。一夏くん頑張ってください。

そうそう、興味深い話を聞きました。

なんでも、セシリアさんが一夏くんとISの練習を一緒にするといふのです。

この話にはさらに篠ノ之さんと要さんが加わってこのクラスの専用機持ち+2の練習となりました。

実は一夏くんと一緒に練習をしようと誘われましたが僕は断りました。僕の目標はセシリアさんと一夏くんです。二人を倒すために二人と練習するのでは身が入らなくなってしまうそうです。

ですので一夏くんにはお互い強くなったときに再戦しようと言いました。一夏くんは快諾してくれました。本当にいい人です。

そんな訳で、僕は僕で強くないといけません。

なんだか何も無い野原に投げ出されたような感じで、自由すぎでどうしたら良いのか…………。

ISで強くなるために………… そうだ、本音ちゃんに聞いてみよう！

教室を見渡すと窓際でクラスメイトと話をしている本音ちゃんを見つけたので、

近づいて挨拶を交わして早速本題を切り出してみた。

「ねえ本音ちゃん。ISで強くなるためにはどうしたら良いと思う？」

「そうだねー。おりむー達と一緒に練習したら？」

「それはだめ、僕は一夏くん達と戦いたいんだ。その一夏くんと練習したら本末転倒だよ」

「そっかー、うーん…………なら先生に相談したらどうかな？」

「先生…………、そっか、織斑先生や山田先生に相談すれば教えてもらえそうだね」

「良かったね羽ちゃん。頑張ってたねー」

「うん。ありがとう本音ちゃん」

僕は本音ちゃんに感謝して教室を出た。

というわけで早速やってきました職員室。

「なに、強くなりたいだど？」

「はい。どうすれば一夏くんやセシリアさんに勝てるようになりま
すか？」

「当然だ。大体あんなひよっこどもなど誰でも少し練習すればすぐ
勝てる」

「そうなんですか!!?」

驚きの言葉だった。あんなに強かった二人を簡単に倒せる!?
やっぱり織斑先生に相談してよかった。本音ちゃんありがとう。

「ああ、だがその前に聞きたい事がある。おまえは何故強くなりた
いのだ？」

「何故強くなりたいか………ですか」

強くなるうとする理由……。それは一夏くとセシリアさんに勝つた
めだ。

なら何故勝ちたい？ それは負けて悔しかったからだ。
なら、何故悔しかった？

「どうした？ 言えないのか？」

「いえ、

何故強くなりたいかですが………きっとそれは、僕が『男』だから
だと思えます」

自分という根底から溢れる感情はきつと『男』である自分の物なの
だろう。

自分が『男』であるからこそ、負けたことをそう簡単に許容できな
い。

ああ、だから悔しいのだろう。だからその負けという過去を消し去
りたいのだろう。その負けを勝利という栄光で上書きしたいのだら
う。

「ふっ、なるほどな。いいだろう、指導くらいはしてやるう。

私の指導を受けるなら最強になってこの学園を卒業してみせろ！」

「は、はい！ ありがとうございます。精一杯頑張ります」

織斑先生の指導を受ける事となった。

やった。うれしい。

「ふむ。では早速だが」

「はい！」

「今から校庭を100周して来い。今日はそれが終わったら上がっていいぞ」

へ？

「い、今からですか？」

時計を見ると今はもう4時だ。

「さっさと行け、寮の玄関は7時に閉める。後3時間だ、急げよ！」

「はい〜！」

部屋に行って急いで運動用の服に着替えて校庭を走り始めた。時間までに間に合うでしょうか？

面白い奴が入ってきたな。

今までの学生はほとんどが私に遠慮して教えを請おうとはしない。まったく勿体無い、折角IS学園にいるのだから手っ取り早く強い奴に教えてもらえばいいではないか。

そう思っていたが今日、奴が私の前に現れた。

奴は三人目の男である一宮羽。三人の中で一番パツとしない男だった。

ISの適正も低く、身体能力も普通。穏やかな性格で特に何事も無

くこのIS学園での生活を終えるだろうと思っていた。

がしかしどうだろう、こいつは私の前に教えを講うてきた。話を聞いてみると意外と心の中は熱く燃えているらしい。教えて受けに来た理由も一夏たちにリベンジをしたいからだとか。ならば教えてやろう。この私の全てを！

ふっふっふ、コイツがどう成長していくかが楽しみだな。

しかし正直、弟である一夏が一番に来ると思っていたがな。

話を聞くにあいつは幼馴染や新しく出来た友人たちと仲良く修行しているらしい。まったく、弟なら真っ先に私のところに来るのが筋だろうにまったく。

雑談フェイス

一夏くんはモデル

「一夏くん。今日は一緒に帰らない？」

クラスメイトがそんな風にひっきりなしに声を掛けるが……。

「すまないが一夏はこれから私たちと一緒に特訓があるのだ」

「ごめんなさいね」

一夏親衛隊（羽命名）によって防がれてしまうのだ。

・一夏親衛隊

隊長：篠ノ之箒

隊員：セシリア・オルコット

隊員：鳳鈴音

今後増える可能性大いにアリ

当の本人はどう思ってるか聞いてみた。

「ねえ一夏くん」

「ん？ どうしたんだ羽」

「一夏くんはモテモテだね。 本人としてはどう思ってるの？」

「へ？ 何言ってるんだ。俺がモテるわけないじゃんか。

モテるんだったら今頃彼女くらいいるさ」

「……………ありがとう一夏くん」

自覚無しでした。

次に親衛隊の人に話を聞いてみた。

Case 1 篠ノ之箒

「ねえ箒（以前に苗字で呼ぶなと怒られた。一夏くんが庇ってくれた）さん」

「むっ……なんだ一宮」

「篤さんは一夏くんのどこが好きなの？」

「な！ ななななんだって!!?」

「へ？ だから一夏くんの「わああ言うな言うな!」むぐう!!」

その後誰にも言うなと木刀をちらつかせながら約束させられました。

Case 2 セシリア・オルコット

「オルコットさん」

「あら？ 羽さんではありませんか？ どうかなさいました？」

「うん。セシリアさんは一夏くんのどこが好きなの？」

「ええ!？ わ、私がい、い一夏さんの事を好きだという事を、なぜご存知なのですか!？」

「え？ 見れば分かるけど……」

「そ、そうなのですか……」

「落ち込まないで下さいセシリアさん。僕応援してますよ」

「は、羽さん……………」

「どうしたのセシリアさん。目を潤ませちゃって」

「羽さん、ありがとございます。

こんな風に真正面から応援されてわたくし感動しましたわ。」

「え、ああ、そのお、……………」と、当然ですよ！」

その後、セシリアさんは僕に一夏くんの素敵な所などを存分に話し、満足して帰っていきました。

Case 凰鈴音

「鳳さん」

「誰アಂತア？ 気安く話し掛けないでよね」

これで終わりでした。そういえば紹介受けてませんでした。

ちょっとした好奇心でしたが結構楽しめたと思います。

研究結果を仲のいい友達4人に発表してみたんですが、情報が足りない和不評でした。

次はもつと頑張ります。

実は鳳さんに冷たくあしらわれてちょこつと落ち込んでたんですが、
本音ちゃんが慰めてくれました。
本音ちゃんありがとう。

雑談フェイズ（後書き）

主人公は仲のいいクラスメイト4人と計5人でつるんでいます。

早朝ランニング

最近の日課になった朝のランニング。

まだ若干暗い外をジャージで走る。走ってみると意外な事が新鮮に感じられた。

まずは外の冷たさ、ひんやりとして体を心から冷やしてくる。

そしてまだちよつと暗さが残っているのにも関わらずチュンチュン鳴いているスズメ、こんな時間でも鳴くんだ！とちよつと驚いた。

そして僕と同じく早朝のランニングをしている女の子、よく見ると同じクラスの綿貫翠さんだった。

話し掛けてみると意外と普通に返してくれる。まあそんなツンツンしてる人ばかりじゃないよね。

「おはよう翠さん。今日も朝早いね」

「おはよう羽くん。羽君こそ早いよ」

大体走ってる時刻と場所が一致するため、この時間は二人一緒に走ってる事が多い。

そのお陰もあって最近特に翠さんとは仲良くなっていると思う。

「そういえば羽くん」

「ん？ どうしたの翠さん」

「羽くんって、織斑先生に弟子入りしたんだって？」

「え？ あ、うんそつだよ。っていつかあれは弟子入りになるのかな？」

「どっぴいっしょっ？」

「うん」

なんとというか単純にISで勝ちたいので鍛えてくださいって言ったんだよね確か。

……あれ？ 弟子入りでもおかしくないのかな？

「思い返してみたけど、やっぱり弟子入りだったよ………たぶん」

「？ なんだか分からないけど弟子入りはしてるのよね」

「うんそつだよ」

「………」

「どっぴしたの翠さん？」

「ねえ羽君」

「なに？ 翠さん」

「………私も、織斑先生の弟子になりたい！」

「ええ！？？」

突然の話に驚く。

翠さん、先生に弟子入りしたいの!?

「織斑先生すごく厳しいよ?」

「うん。覚悟してるわ」

僕の顔を真剣な目で見ている、その目から真剣さが窺える。

(本気なんだ!)

すごく厳しい先生なのに、翠さんすごく度胸があるんだなあ。

ちなみに僕の返事としてはもちろんOK。ただし弟子入り出来るかどうかはわからない。

僕に出来る事はある程度の口利きだけだから。

「うん、分かったよ。とりあえず今日の放課後に一緒に先生のところにお願いしに行こっか」

「ありがとう羽くん!」

「むぐう〜」

翠さんに抱きしめられた。

翠さんは普段良く運動をしていて引き締まった体に出る所も出ているとてもスタイルのいい体をしている、なので僕の顔はその体、詳しく言つと双丘に埋まってしまつて呼吸が出来ない。

「むぐう〜〜(離して〜!)」

「あ、ごめんね羽くん」

ちよっと申し訳ないような顔をした翠さんは僕を離してくれた。高まった心音を落ち着かせる。むむむ、顔赤くなってないかな？

「あはは、羽くんも男の子だね」

「むー、当たり前だよ！ 僕は『男』なんだから！！」

「ごめんなさいね。あはは」

楽しそうに笑う翠さんに僕はとてもじゃないけど文句なんか言えるわけない。

きっと僕の顔は赤くなっているだろう。ああ恥ずかしいなあもつ。

「もう！ 先行っちゃうよ」

「あ…！ 待って、羽くん！」

追いかけてくる翠さんに顔を見られないように僕は走るスピードを上げた。

ちなみに、弟子入りの願いは飛び入りで参加してきた翠さんの友人たちと一緒にしてきました。

織斑先生はちよっと嬉しそうでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3862z/>

弱者は努力する。

2012年1月5日00時50分発行